

インフルエンザ

2007.03.02

函館近郊のインフルエンザは、いつもより1ヶ月遅く、今流行の極期を迎えようとしています。今年の特徴は、教室の中でウイルスが伝播するのではなく、スポーツ大会などで感染してその2日後から発熱というパターンが多いようです。というわけで、ほとんどは月曜日が忙しいのが通例の小児科ですが、今年はなぜか火曜日が忙しいと感じる日が多いです。

昨年も話題になりましたが、インフルエンザ治療薬の服用後にわけのわからない言葉を言ったり、高いところから飛び降りて死亡したりという事例が報道されています。インフルエンザの治療薬は、日本では、アマンタジン、オセルタミビル、ザナミビルという薬を使うことが出来ますが、特に報道されているのは、オセルタミビル（商品名タミフル）という薬です。

オセルタミビルは、インフルエンザウイルスがのどや気管の細胞で増殖し外に出て広がる時に使われるノイラミニダーゼという酵素の働きを妨げる薬で、口から飲んで使用します。薬の成分は私の調べた限りにおいては、脳への移行は少ないとされているのですが、重大な副作用として神経系への作用があり注意が必要だとされています。

インフルエンザの病気そのものでも、見えないものが見えるといったり、変な音が聞こえるといった神経系の症状が出ることはしばしば経験するところです。厚生労働省が以前行った調査では、タミフルの服用の有無に関わらず、神経系の症状の発現割合に統計上の有意な差がないとして因果関係がないという結論でしたが、再度検討が始まっているようですので、その結果に注目したいと思います。

21世紀の世の中、まだまだわからないことが多いです。でも、はっきりいえることは病気はなるものではなくて予防するものだということです。今年も今までの結果では、インフルエンザに罹った人の3分の2はワクチンを受けていない人です。この結果からワクチンが極めて有効であるという結論は無理ですが、集団生活をしているこども達のために、ワクチンをするということは有益だと私は思っています。